

4月初旬 チェルノブイリ被災地代表訪問 28年目のベラルーシとロシアの被災地を視察 チェルノブイリとフクシマを結んで… 支援とメッセージを届けてきます

前号でお伝えしたとおり、昨年12月に予定していたチェルノブイリ被災地訪問は、グラスノポーリエで受け入れをして下さっているベーラさん(小児科医)の夫のニコライさんの病気のため、延期になりました。その後、改めて計画を立て直し、4月8日～19日に、ベラルーシとロシアの被災地を、事務局の振津とモスクワ在住・通訳の松川直子さんの二人で代表訪問する準備を進めています(日程は別表)。今回も皆さんから寄せられた支援カンパやメッセージをベラルーシの被災地に届けたいと思います。例年どおりベラルーシでの訪問先は、ミンスクのマリノフカ地区の「移住者の会」、モギレフ州の汚染地クラスノポーリエ、チェリコフ、ベリニチで、学校、幼稚園、病院、障害者センターなどを訪問する予定です。

1月に松川さんが電話でベーラさんに連絡を取ってくれた時の話しでは、11月に脳卒中で倒れた夫のニコライさんは、一時、意識不明の重体だったとのこと。なんとか一命を取り留め、現在リハビリを進めておられるようですが、ご家族の介護が必要だそうです。4月の訪問時に、どのような状態にあるか、まだ予測がつかないようです。引き続き、現地と連絡をとりながら、ベーラさんにご迷惑のかからないように対応したいと思います。

チェルノブイリ被災地では事故から28年経っても放射能汚染はなくなりません。これからも被災地の人々の健康と生活を守るための様々な取り組みや、チェルノブイリを忘れないで伝えて行く取り組みが必要です。一方、私たちの日本では、フクシマ原発



マリノフカの街

での重大事故から3年を迎えようとしていますが、被災地での問題は山積み状態のまま、また事故原発のほんとうの収束にはまだ何十年も要します。チェルノブイリとフクシマを結ぶ私たちの交流も、しっかりと続けたいと思います。20年あまり私たちが交流を続けてきたチェルノブイリ被災地の方々も、年齢を重ねられ、活動を続ける上で様々な制約が生じてくるのは、やむをえないことです。チェルノブイリ被災地でも、私たちの日本でも、若い世代の人々とともに「チェルノブイリとフクシマ」を結び、被害者支援や、これ以上の核被害をなくしてゆく活動をもっと広げたいと思います。

尚、今回の訪問では、福島飯館村から避難されている方々の支援に取り組むNGO「エコロジー・アーキス ケープ」(EAS)の要請を受け、旅程の後半は、EASのメンバーの視察をサポートし、マリノフカの「移住者の会」との交流、ロシアの被災地ノボツィプコフ訪問のコーディネートをする事になりました。EASでは、チェルノブイリでの移住者の経験、また農村地帯の被害と対策の経験を視察し、飯館村の被災者支援に役立てたいとのことです。ロシアのノボツィプコフは、ノボ・キャンプを運営しているNGO「ラディミチ」のアントンさんらが受け入れをしてくれます。ノボツィプコフに数日滞在して現地視察するのは私たちも初めてのことで、しっかりと見聞きし、帰国後、皆さんにお伝えしたいと思います。

4月27日「チェルノブイリ事故28周年の集い」で、訪問報告をします。ぜひご参加下さい！ チェルノブイリとフクシマ支援カンパに、引き続き、ご協力お願いします！

事務局：振津かつみ

現地訪問予定：

- 4月 8日：関空発、モスクワ着、夜行でモギレフへ
- 9日：早朝モギレフ着、車でクラスノポーリエへ
- 10日：クラスノポーリエ(学校、幼稚園、障害者センターの他、訪問)
- 11日：チェリコフ、ベリニチに立寄り、ミンスクに移動
- 12日：ミンスクのマリノフカ滞在「移住者の会」交流、EASのメンバーと合流
- 13日：EASのメンバーとともに移住者の会」交流
- 14日：ミンスク市と周辺見学、夜行でノボツィプコフへ移動
- 15日：朝、ノボツィプコフ到着、「ラディミチ」訪問
- 16日：ノボツィプコフと周辺の汚染地域視察(主に農村地域)
- 17日：同上、夜行でモスクワ移動
- 18日：朝、モスクワ着、夕刻、モスクワ発、機中泊
- 19日：関空着

「救援関西」発足 22 周年の集い

—チェルノブイリとフクシマを結んで、支援・交流を考える—

—フクシマを「核時代の終わりの始まり」に—

2013 年 12 月 23 日(月)クレオ大阪中央にて「発足22周年の集い」を持ちました。フクシマ事故から 2 年 9 ヶ月経ちますが、被災地では今だに 14 万人もの人々が放射能汚染により避難生活を余儀なくされています。家族・地域社会がバラバラにされ、生活が奪われ、故郷が奪われています。その中での苦しみ・悲しみ・先の見えない生活への不安などが続いています。帰還・除染・放射性廃棄物の貯蔵等等、問題は山積したままです。また福島と近隣県、北関東を含む広大な地域が「放射線管理区域」レベル以上の汚染となり、多くの人々たちが放射能と向き合う生活を強いられています。「チェルノブイリを繰り返さないで」を合言葉にヒバクのない世界を求めてきた「救援関西」として、広く意見交換し、今後の活動方針を話し合う集会になりました。

【万感の思いを込めて】

集会は、代表の長崎被爆者・山科さんの挨拶から始まりました。「こんな私が(車いす姿になってしまい)言ってもねえ・・・」と言いつつ登場すると、大拍手です。長崎で被ばくしたこと、数え切れない辛い思いをして、原爆をなくすため、世界を巡ったこと。チェルノブイリに行って、「必ず私のようなヒバクシャが出ます」と訴えたこと。高齢になってからも、アメリカの学生さん達に招聘されて、アメリカ講演ツアーをしたこと、そして、「これ以上人々が被ばくに苦しむことがないように！」と万感の思いをこめて訴えられました。



【チェルノブイリとフクシマを結んで、支援・交流を広げる】

救援関西事務局・猪又より、今年の活動を振り返り、来年の取り組みについて提案しました。関西でも「フクシマ事故」の風化がすすむ中で、私たちは「負けねど飯館！！」の常任理事・佐藤健太さん、福島現地で「カーチャンのカプロジェクト」を設立し頑張っておられる渡邊とみこさん、地震・津波・原発事故のためにいわき市から避難してこられた遠藤雅彦さんをお招きしてお話を伺い「フクシマ」の実情を少しずつでも知り、広めようと努めてきました。またお互いに「顔の見える関係」を大切にし、交流を深めたいとの思いから「救援関西」のメンバー6人で福島の被災地を訪問しました。「ゴーゴーワクワクキャンプ」の若い方々の活動をサポートすることを通じて、子ども達の保養にも微力ですが協力しました。チェルノブイリの汚染地ベラルーシのクラスノポーリエの子ども達の保養「ノボキャンプ」にも資金援助をしてきました。

来年の取り組みについて以下のことが提案されました。

*** チェルノブイリとフクシマを結んでひろげよう！ 支援・交流**

*** フクシマを「核時代の終わりの始まり」に！**

①「チェルノブイリ事故28周年の集い」に取組みましょう：4月27日

チェルノブイリとフクシマを結ぶ(福島からのゲスト?)

再稼働へ向けた動き、被害者支援切り捨てが強まる中で、それへの厳しい批判を(引き続き)過小評価への批判、国内外のヒバクシャ支援、反核・反原発運動等と連帯して、アピールを発するなど検討してはどうか

②引き続き、チェルノブイリ支援に取組みましょう

-「ノボ・キャンプ」へのベラルーシの子ども達参加支援

- 現地調達を主体にするなど、現地のニーズにあわせた支援を(4月現地訪問予定)

③チェルノブイリとフクシマとの交流をさらに進めましょう

- フクシマの方々とともにチェルノブイリ被災地交流訪問の準備開始

-「保養活動」の交流、視察のため、「ノボ・キャンプ」訪問も検討(現実的には再来年以降?)

- クラスノポリエの子どもたちと福島の子どもの交流の可能性?

「飯館子どもを守る会」等との協力など

- 「チェルノブイリ 30 周年、フクシマ5周年(2016 年)」に向けて、準備、議論開始

④フクシマ支援に取組みましょう：

- フクシマ事故被災地の子ども達の「保養支援」への協力に引き続き取組みましょう

・ゴーワークキャンプへの支援

・被災地により近い「非汚染地」での保養プロジェクト??

-「カーちゃんのカプロジェクト」のサポーター支援

- 「健康手帳」交付(無料検診と医療、健康管理の充実)などを求める被災者の運動への支援

⑤フクシマ被災地と関西との交流を深め、被害の実相を広く伝えてゆきましょう：

- フクシマ事故で被災した方々を関西に招いての講演、交流会の企画など：

- フクシマ訪問、交流

⑥チェルノブイリ被災地との交流をふまえ、チェルノブイリ被害(健康／社会経済／文化)をより詳細にリアルに知り、より正確な情報を日本で伝えていきましょう

⑦IAEA をはじめ、原発、核エネルギー利用を推進する人々による、チェルノブイリとフクシマ事故の被害過小評価への批判を強めましょう。被害者とともに、支援者、反核・反原発、人権擁護、環境保護、等、広範な運動と連帯し、このような動きを跳ね返してゆきましょう。

⑧原発再稼働に反対し、脱原発と再生可能エネルギーへの転換を求める取り組みに、積極的に参加しましょう

- 3月9日フクシマ事故3周年の脱原発集会など

チェルノブイリ被災地との交流・支援の継続と共に、福島との交流・支援を進めることと、これ以上の核被害をなくすための行動とを、どのように組み立てるか話し合いました。「救援関西」としては、「チェルノブイリとフクシマを結んで、支援・交流を広げる」ことを基軸に活動しようと計画をたてました。

【フクシマ事故の健康被害の過小評価批判～被害者の健康と人権を守る立場から】



事務局の振津から、「国連科学委員会(UNSCEAR)の福島事故の被ばくと影響に関する報告批判」と『福島県民健康管理調査』の小児甲状腺癌の現時点の調査結果を考える』の二つの報告がされました。

UNSCEARは、もとより原子力の「平和利用」を進めるために設立された組織です。チェルノブイリ事故の後にも国際原子力機関(IAEA)等とともに「チェルノブイリ被災地の被ばく被害は小児甲状腺ガンのみ」と、被ばく健康影響を過小評価してきました。昨年の国連総会に出された「UNSCEAR報告」では、フクシマでは「放射線によるガンは、他のガンから区別することができない…事故の放射線被ばくによるガンの増加は確認できないだろう」などと、またしても被害の切り捨てを行おうとしています。私たちは、チェルノブイリのヒバクシャをはじめ、世界の運動と連帯してこのような動きを厳しく批判してゆかねばなりません。

福島県では、事故当時18歳以下だったの子どもたちの甲状腺検査が行われています。(2013年末までに約27万人の調査がなされ、悪性または悪性疑い75人[手術後、良性結節と診断された1名を含む])。調査を担当する県立医大の医師らは、「チェルノブイリで小児甲状腺癌が増加したのは4年目からなので、現在診断されている癌は事故による被曝と関係ない」と主張しています。しかし事故で被曝させられてしまった事実がある以上、現時点でも被曝が関与して発症した甲状腺ガンが症例の中にも含まれている可能性はあり、「被曝と関係ない」とはいえないはずです。私たちは事故の被害に遭われた方々を支援し、ともに放射能汚染と被ばくに向き合い、健康と命、生活、人権を守ることをめざす立場から、今後、この問題にも取り組んでゆきたいと思います。その際、「科学的に理にかなった評価」に基づいた取り組みを進めることが重要です。

【怒りにふるえて】

ダンス コア ポシブルのみなさんが、創作バレエ「怒りにふるえて」を踊りました。

いままで、チェルノブイリのあの日のこと、ヒロシマ、長崎被爆者山科さんの軌跡、祈り、希望…多くのテーマで踊っていただきましたが、今回はフクシマ事故に対する「怒り」。



悲劇を経験

しても何も変わらない、煮えくりかえる思いを、子ども達も含めて新たに構成し、練習して、迫力の舞台でした。初めて観た参加者もいて、引き込まれていました。



【ゴーゴー・ワクワクキャンプのお話し】



関西での直接的な被災者の支援として、子ども達の保養(キャンプ)の活動が各地で行われています。京都精華大の学生を中心に始まった、「ゴーゴーワクワクキャンプ」から石橋武史さん・伊達一哉さんの報告がありました。2年目からは、京都南丹の古民家に拠点を作り、関西の保養グループと連携し、キャンプの内容や安全対策、補助金の確保等、確実に前進していることがわかりました。なにより子ども達の笑顔や、参加しているスタッフのモチベーションの高さが、話しを聞いていて、なんともっこりしてしまう、「ゴーワーク」でした。

【福島被災地訪問報告】

6月に「救援関西」のメンバー(大阪のおばちゃん)6人で福島現地を訪問・交流した時の様子を久保が紹介しました。放射能汚染のために放棄され草ボーボーの畑や田、石垣や



道端での除染作業をしている人、行き場もなく「仮・仮置き場」に置かれたままの除染の放射性廃棄物、そしてそれぞれのフクシマを抱えながら避難生活を余儀なくされている人々などなど。フクシマ事故から2年以上も経つのに変わらぬ被災地の苦しみや怒りなどがストレートに伝わりました。



仮・仮置き場の廃棄物

【展示とバザー・その他】

いつものベラルーシグッズと「パティシエ田中章子」のケーキ、福島の「かあちゃんのか」(飯館の渡部トミ子さんの)お豆さん、そして、今回伊藤富弘さんが東北・石巻の被災地グッズを販売してくれました。そして、参加者の三田さんが、防災グッズと放射線カウンター、自作の陶器を販売、賑やかなコーナーでした。・・・ちょっと大もうけ？



追伸：毎日新聞の大島さんの記事を見て、会場近くのおもちゃ問屋さんが、お祭り縁日用のおもちゃをたくさん寄附してくれました。有り難うございます。被災地と、関西のキャンプで使わせていただきます。

2014年 1月 9日 毎日新聞 夕刊 社会面

憂楽帳



問屋さんの段ボール箱

京阪神の主婦や医師、教師らが長年、原発事故の被害者に寄り添ってきたボランティア団体がある。1991年に設立された「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」。チェルノブイリ原発事故（86年）で放射能汚染地域となったベラルーシの病院や学校に医薬品や学用品を贈ってきた。福島第一原発事故以降は、福島の被災者支援に力を注いでいる。

歳末、問屋街がある大阪市の「松屋町筋」近くの会場で、救援関西による被害者支援を呼びかける集いがあり、事前に案内の記事を書いた。

当日、40〜50代の夫婦が大きな段ボール5箱を届けに来た。中は金魚すくいや買い物遊びの道具、パーティーグッズなどいっぱい。婦人は案内の記事で集いを知ったと告げ、「福島の子どもたちにあげてください。この近くのおもちゃ問屋です」と言ったが、名前を名乗らず、車で待っていた夫と一緒に立ち去った。

おもちゃは、避難生活を送る子どもたちへの「プレゼント」となる。救援関西のメンバーと一緒に、温かいものをいただいた思いになり、小さな記事も大切にしたいと改めて思った。【大島秀利】

2014.1.9

毎日新聞・大島記者が記事を書いてくださいました。
私たちも思いがけないプレゼントに、温かい気持ちさせてもらうと同時に、大きな力をもらいました。

頂いた沢山のおもちゃ



怒りにふるえて

健康手帳の獲得を！

ダンス コア ポシブル

小谷ちず子



山科さんのお声が一層リアル感を高め、踊っているあやかは泣きそうになったと言っていました。私達も抱き起こしに行ったとき「あ～良かった助かった」のお声に泣きそうになりました。一期一会の貴重な舞台を体験させていただきました。感謝でした。

いつもじくじく思っていることは一何一つ福島がとれていないのに 福島が何一つ終わってないのに 首相自らが会社の手先となり原発をアジアに売り込みに行っているという事実には震えるほど怒りを感じています。原発を売り込むのであれば何かあったときの後始末のノウハウまでつけるべきです。つまり福島の後

始末をしてからこそだと思のです。またまた経済優先のみに走る厚顔の日本政府だと…。しかもその政府を選んだのはほかならぬ日本の有権者なんです。そこまで考えが行くと怒りを通りこしてしまいます。結局大半の人は福島の人たちのことを分らない、想像力のない、痛み寄り添えないのだと 怒りを通り越して絶望的な気持ちになります。そして大したことも出来てない自分を情けなく思のです。でも絶望だけしていても仕方ない、とにかく一人一人が自分の出来ることをしていくしかない。だから私はこれからも踊っていきます。また広島原爆手帳を父と母がいつも大変有り難がり感謝していたことから、1日も早く福島の人たちにも安心して医療が受けられるよう健康手帳を渡して欲しいと思います。少しでも安心しました少しでも責任をとって貰えたと感じられ元気を出して貰えるようにと願わずにはいられません。あの組織がこの組織が意見がまとまらないとお話でしたが「ただ一点健康手帳の獲得」に皆さんの力を結集していただきたい」と言いました。これは本当に実現に向け具体的に行動したいものだと私自身も思っています。



本当に、こうして今年も絶望と希望をゆきつもどりつしながら少しでも前に進めたらと思います。どうか今年もよろしく願います。

ベラルーシからのメッセージ

親愛なる「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さま

皆さまの「発足22周年の集い」、お祝い申し上げます。

また、皆さま方が、よき新年を迎えられますようお祈りします。

チェルノブイリの被災地から、原発事故の被害に遭われたフクシマの方々、いわきや他の地域に避難を余儀なくされている方々に、心からのご挨拶を送ります。

私たちは、日本の全ての友人の皆さんの、ご健康、ご多幸、ご繁栄を、そして社会活動の成功を、切に願っております。

モギレフ州クラスノポーリエ
ベーラ・ルソーバ(小児科医)

「移住者の会」のジャンナさんから新年のご挨拶

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」の皆さん、新年おめでとうございます。

皆さんと、皆さんのご家族、親しい友人の方々の、ご健康、ご多幸を心から願っております。

また近いうちにお会いできるのを心待ちにしています。

ミンスク、マリノフカ地区「移住者の会」
ジャンナ・フィロメンコ



何も変わらない！ 何も変わってない！！

3a！郡山

野口時子

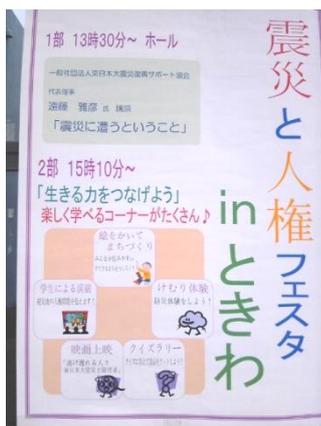
私たちが『被害者』になってもう3年になります。

目に見えない・匂いもしない放射能は私たちの住む街や峠を越えた隣の街、県境も越えて、多くの地域に降り注ぎ、被害者を増やしました。被害はみな同じ『放射能汚染』のはずなのに、一方は子どもを守る為に脱被曝を目指して徹底的に注意する事を選んだ人、もう一方では今までの生活を継続させたいと考える人、それを実践する人、「復興」の名のもとに今まで以上の生活を考える人、その間で思い悩む人、何故か大きく二つに分かれてしまいました。そして、目に見えない被害はまた生まれました。住民同士の対立です。子どもを守る為に普段の食事に気を使い、地元農家さんが丹精込めて作った作物を避け、なるべく産地の遠いところの物を選ぶことで起きる『風評被害の首謀者』『神経質な人』といういわれもないレッテル付けです。以前の学校給食なら地産地消はとても良いことだと思のですが、震災後は納得のいく事ではありません。だから私たちは声を上げました。「主食に地元産米の使用を止めてください」郡山市議会に請願しましたが、「大丈夫、食べても安全です！」と私たち母親の声は聞いてもらえませんでした。議員と名乗る大人たちは子ども達の健康な未来を守らずに何を守ったのでしょうか？この事は郡山市議会だ

けではないと思います。果たして、福島県は、日本は、子どもの未来を守っているのでしょうか？

原発事故を起因とする病気は「5年後から小児甲状腺がん」だけだとして18歳以下の子どもだけが甲状腺エコー検査のみを受けています。2013年12月末までの経過報告によりますと75例が「悪性」と診断され手術までしているにもかかわらず「5年未満なので原発事故に由来するものではありません！」と報告しています。この事がまたも私たちの国に対する不信を募らせます。「年間20ミリまで大丈夫」とか「笑っている人には放射能は来ません」とか「病気は小児甲状腺がんだけです」等々、私たちはもう騙されたくはありません。もう黙っているわけには行きません。黙っていても何も今までと変わらない事に気づきました。子ども達を守る為に、子ども達に明るい未来をバトンするために、私たちが今やれる事、今やるべき事をやる！ 変わらない事を嘆くだけではなく、小さい声でも上げていく！ 弱小母親グループの仲間を少しずつでもいいから増やす！ 少しずつでも確実に前へ進む！！ 子どもを守る為に母は頑張ります！！ 福島事故はまだまだ収束していません。どうか、私たちと繋がってください。今後とも宜しくお願い致します。





先日、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西でもお話をしてくださった遠藤さんが、平野区の人権講演会でお話をされました。

保養に来た子ども達と関わった常磐会学園のボランティアクラブの学生さん達が自治体を巻き込んで企画しました。写真は平野区のマスコットヒラッシー？



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2013. 11. 25～2014. 2. 15)

大田美智子 山崎知行 岡本達郎 公庄れい 旦保立子 田原良次 中川慶子 尾上照子 稲田みどり
 森本良子 小副川久代 小村幸子 西尾漠 杉村ルミ子 遠山薫 梅原桂子 松本邦夫 折口晴夫 齋藤
 由香 山田耕作 岡田由江 斉藤直樹 中井かをり 中西克史 即得寺 山平利恵 前田ひろみ 清水昭
 北川諭 嶋田千恵子 斉藤充子 長澤由美 村上雅洋 長澤啓行 山崎清 小谷ちず子 ダンスコアポッ
 シブル 定森和枝 富田洋香 さとうみえ 佐藤大介 曾我日出夫 高木祥伍 石地優 白山勝久 鹿間桂
 子 田中章子 崎山昇 奥平純子 吉崎恵美子

(順不同・敬称略)

カンパ・会費納入のお願い

いつも皆様のご支援・ご協力ありがとうございます。皆様に支えられて「救援関西」は発足23年を迎えることができました。今年もフクシマとチェルノブイリを結んで支援・交流を深めることに、微力ながら尽くしていきたいと思えます。「救援関西」は皆様のご支援・ご協力に支えられています。どうぞ今年も物心両面にわたりご支援をよろしくお願い致します。



